

学校の基本的枠組み

【設置場所】

現在の都立大島海洋国際高等学校の敷地を基本とし、各種実習施設の在り方や寄宿舎の在り方などについては、引き続き設置場所も含めた検討を行う。

【学校規模】

現在の施設・設備の状況、入学者選抜の応募倍率の推移などから、1学年2学級（1学級35人）の合計6学級（210人）の規模を想定する。

なお、今後の社会情勢、入学者選抜の応募倍率の推移などを検証しつつ、学校施設等の学習環境改善の際に、再度、規模について検討することとする。

【学校名、学科】

「海に学び、未来を拓く。」を教育理念とし、広く世界を舞台に活躍する海洋人材の育成を図る学校とすることから、学校名、学科名については変更せず、これまでの海洋国際科（国際関係に関する学科）から海洋国際科（水産に関する学科）に改編し、同校の伝統を継承しつつ海洋に関する専門的な教育を実施する。

なお、海洋国際科には、小学科として、「船舶運航技術科」「海洋生物科」「海洋産業科」「海洋創造科」の設置を想定する。

小学科ごとの人数については、引き続き検討することとするが、ホームルーム活動などの学級規模は小学科の構成を考慮しつつ、35人学級とすることを想定する。

【開校予定年度】

現在、学校の在り方に合わせ、改編後の学校に入学を希望する生徒の入学前準備期間を確保することなどの観点から、改編時期を2020年4月（1年生の受入開始）の予定で検討を進める。

入学者選抜

【今後の検討】

実習船「大島丸」での洋上生活、寄宿舎における集団生活及び専門科目を中心に実施する多様かつ多くの実習といった特徴ある学校諸活動に対する意識・意欲をきめ細かくみるための選抜について、面接等の在り方、学力検査や調査書との関連なども含め、総合的に検討していく。

系統的な進路指導

【今後の検討】

入学を希望する中学生段階から、海洋を舞台に学習することの意義や将来のキャリア像などを学校説明会や学校案内などで広く周知するための方策を検討する。
更には、生徒が、志望した学科で粘り強く学び、モチベーションを維持しながら周りの生徒と切磋琢磨し、将来の進路に向かって努力し続けることができるよう、系統的な進路指導を行うことや、小学科ごとに異なる進路に精通した指導を可能とすることなどを含め総合的に検討していく。

実習船「大島丸」

【今後の検討及び現在の検討状況】

在り方検討の方向性を見据え、現大島丸のような漁業中心の船型や装備ではなく、船舶航海技術を広く学ぶことができる船型としつつ、漁ろうを含む生物資源量調査や海洋生物調査、海底地形調査、更にはメタンハイドレードなどの非生物資源、海上を漂う海洋ゴミ調査といった、船舶の航海技術と、海上、海中、海底を様々な観点から調査観測することができる総合的な実習を可能とする実習船とするよう、現在、外部の専門家を交えて検討を進めている。

教職員等の確保・育成

【今後の検討】

在り方検討に基づき、専門的な学習を支える教員の資質・能力の更なる向上や、様々な人材（航海士、潜水士、研究者等）の活用など、安定的な教育実施体制を検討する必要がある。
また、安全な大島丸の運航を安定して実施可能とする船員体制や、陸上からの船舶管理体制、寄宿舎における生徒の精神面や体調面のケア、生徒指導などを実施できる支援体制などについても検討する必要がある。
こうした人材を、いかに確保・育成していくかを含め、総合的な観点から検討していく。

寄宿舎教育

【今後の検討】

寄宿舎での教育については、共同生活を行う中で、規律性や協調性などの人格形成を目指すこと、宅習（寄宿舎での学習）を通じて学力の定着と向上を図ることが求められる。また、寄宿舎でのグループ活動などについても検討し、学校での教育と連携しながら、より効果の高い教育を実施していく方策を検討していく。

地域振興・島しょ振興

【今後の検討】

大島に伝わる独自の伝統や文化、行事などに広く生徒、教職員、保護者などが関わることで、地域との交流を図り、地域の活性化と第二の故郷としての郷土愛などを育成することも求められる。
また、学校での学びを生かした地域産業への協力や地域への海洋教育の普及なども検討していく。
更には、地域の方々の学校への協力や支援といったことについても、大島町と連携しながら進めていくことで、地域に開かれ、地域に愛される学校としていくことについても検討していく。